

Title	日本語学習と日本語の文化的要素
Author(s)	高, 偉建
Citation	阪大日本語研究. 3 P.73-P.93
Issue Date	1991-03
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/6126">http://hdl.handle.net/11094/6126</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 日本語学習と日本語の文化的要素

## Learning Japanese and Cultural Elements of Japanese

高 偉 建  
GAO Wei-jian

キーワード：語の意味，文化的要素，日本語学習との関係，教材と授業

### 一 文化的要素とは

#### 1.0 従来の考え方

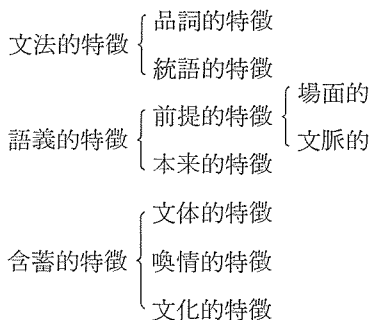
語の意味の定義について、『国語学大辞典』（1980）の「意味」の項（国広哲弥氏執筆）によれば、

語の意味は、社会習慣的に多かれ少なかれ一定した、語使用上の場面的・文脈的諸条件および語と連合した文化人類学的諸特徴の総体である。

となっている。その中で言われている「語と連合した文化人類学的諸特徴」とは、どんなものかについて、次のような例で説明されている。

たとえば「資本家」・「共産主義者」を意味する語の言語学的意味は資本主義国でも共産主義国でもほぼ同じと考えられるが、それぞれの国におけるその文化人類学的意味は「好ましい人物」・「好ましくない人物」というふうに非常に異なっているだろう。これは意味解釈上必要な情報と考えられる。

また、同項目説明によれば、語の意味を、用語の厳密さを求めて、「意義素」と呼び直し、その「意義素」が幾つかの「意義特徴」からなっていると、次のような「意義特徴」が並べられている。



その中で、上記の「文化的特徴」について、次のように述べられている。

サクラが「日本の代表的な花」であること、キクに「皇族の家紋・  
葬儀に飾られる」という連想が伴うことなどがここで記述される。

執筆者の国広哲弥氏は、また、その著書『意味論の方法』（1982）の中で  
次のように述べている。

文化的特徴は連想の形を取る。「ススキ」には秋の淋しさが連想さ  
れ、……「予備校」は大学入試に落ちた青年がどちらかというとき暗い  
気持ちで通う学校という連想があるが、語義的には同じであるアメリ  
カ英語の 'preparatory school'（通例略して 'prep school'）は金  
持ちの子弟が 'Ivy League' に属する一流大学にはいる準備として行  
く学校である。「ソバ」（特に関東地方の場合）とアメリカの「ハン  
バーガー」は実物は非常に異なるが、それぞれの食物文化の中での位  
置はよく似ていて、庶民的で手軽な食物で、ほとんど万人の好物であ  
る。そういう意味で両者の文化的特徴は似ていると言える。

一方、G. リーチ氏は『Semantics』（1974）の中で、意味の七つの分類  
を示している。

1. conceptual meaning or Sense（概念的意味或いは意義）

- |                                   |   |                        |         |
|-----------------------------------|---|------------------------|---------|
| associative<br>meaning<br>(連合の意味) | { | 2. connotative meaning | (内包的意味) |
|                                   |   | 3. stylistic meaning   | (文体的意味) |
|                                   |   | 4. affective meaning   | (喚情的意味) |
|                                   |   | 5. reflected meaning   | (反映の意味) |
|                                   |   | 6. collocative meaning | (連語の意味) |

## 7. thematic meaning (主題的意味)

2. の connotative meaning (内包的意味) について、G. リーチ氏は 'woman' という語例を挙げ、「二本足である、子宮がある；社会的、母性本能がある；おしゃべりの能力がある、料理の経験を積んでいる、スカートまたはドレスを身につけている。慈悲深い、感受性に富む、か弱い、涙もろい、臆病な、感情的な、移り気な」などの特徴があると指摘し、内包的意味は、実際は、あることばを用いたり聞いたりする時に連想する「現実世界」の経験をいうものであると述べている。これは、国広哲弥氏の「文化的特徴」とダブっている部分があると言えよう。というのは、G. リーチ氏の挙げている特徴の中には、単なる一共同体の独特の経験を反映している部分もあると認められるからである。

本稿では、まず、語の意味については、上記の『国語学大辞典』に示されている立場に立ち、「語と連合した文化人類学的諸特徴」に関する部分を語の「文化的要素」と呼ぶことにする。そして、その「文化的要素」を記述するにあたっての①対象②基準③範囲という三つの問題について、詳しく検討してみる。留学生向けの日本語の文化的要素の辞典の作成を試み、更に、その基礎の上で、語の文化的要素をどのようにして、日本語学習に取り入れることができるかについて、自分なりの考え方を述べることにする。

### 1.1 文化的要素の対象について

文化的要素を考える前に、まず、文化について考えよう。文化の定義は、意味の定義と同じように、定義する人の数ほど多く存在すると言ってよい。その中で比較的最近のものとして、倉地暁美氏(1990)がある。

文化は、ある特定の間人集団によって、過去、現在、未来の歴史的経緯の中で取捨選択され、継承され、共有されながら、同時に修正されたり、有形無形な形で、新たに創出されてゆく統合的な精神活動のプロセス、ないしはプロダクトとして、個々の人間の認知枠 (frame of reference) を通して認識されるものである。

倉地暁美氏の立場に立てば、哲学や思想や芸術などは勿論、その社会の

常識と非常識，風俗習慣，生活方式なども文化の範疇内に入ってくることになる。しかし，現実には，「日本文化」といえば，茶道，生花，歌舞伎というようなものを，まず連想する人がある。その場合は，その社会の文化の中での精髓の部分だけがクローズアップされてくる。人々は，特に自国の文化に対しては，往々にして，この一部分だけを文化と見なしがちである。これは文化に対する狭義的な見方である。本稿は，倉地氏の立場に立って，広義的に文化をとらえ，茶道，生花，歌舞伎ばかりでなく，ゴミの出し方や，風呂の入り方なども文化の一部と考える。

ことばは，それ自身も文化の範疇内に入るが，ここでは，それをさておいて，ことばと文化との関係をまず探ってみることにする。

例えば，日本語の「中秋」という語の意味には，①「陰暦の八月十五日の夜」と，②「一年の中で月をめでのに最もふさわしい夜」という二つの側面がある。前者については，他の文化圏の人に伝えるのは特に難しくない。しかし，後者は，中国や朝鮮半島など，月をめでの習慣のある国の人にとっては，説明しやすいが，月をめでの習慣を持たない国の人にとっては，説明するのに一苦勞するであろう。

意味の中での文化の部分に対する理解は，共通した文化的基盤という土台があるのとないのとでは，難易度に差が見られる。しかし，共通した文化的基盤がある場合でも，細々したことになるとう，差異が見られることがよくある。同じ「月をめでの」と言っても，そのめで方となると，日本と中国とを例にすると，日本では月見団子を食べるのに対して，中国では月餅を食べる。気象条件にも差異が見られる。陰暦の八月十五日あたりは，中国のことわざに「月到中秋分外明」（お月さんは中秋になると，格別に明るい）という言い方があるように，中国の大部分の地方は爽やかな秋晴れに恵まれていて，たいいてい月がこうこうと見えている。それに対して，日本は，「中秋無月」ということばがあるように，北海道を除いては，あいにく秋雨前線がかかっている，月は雲に隠れていることが多い。

ことばを聞いたり，話したりする人にとって，そのことばの中に盛り込まれている文化的要素は，ことばの意味の一部としてコミュニケーションに必

要なものである。「中秋」という語を使用する場合は、話し手と聞き手において、上記した文化的要素のほんの一部しか想起されなくても、ことばの文化的要素を記述するとなると、その全部を記述するのが理想的な形である。しかし、それは、地域や環境による差異、或いは個人の経歴による差異があまりにも大きく、しかも時代によっても異なるので、その全部を記述するのは不可能なことであろう。記述する際には、空間的・時間的な制限を設ける必要がある。

## 1.2 文化的要素の基準について

一つの語の文化的要素は、ふつう言われている「概念的意味」が同じな（或いは近い）外国語の文化的要素との比較を通して、より一層はっきりすることができるものである。その場合、Xという文化的要素を考える場合、同時に比較の対象を多く設定すると、記述はうまく行かなくなるおそれがある。仮に、最初に比較するための文化をA文化に設定した場合、X文化にあるが、A文化にないものがまず目につき、それを記述しておく。次に、B文化を比較の対象にすると、今度は、A文化との比較では問題にならなかった部分が問題になってきたり、逆に問題になっていた部分が問題にならなったりするようなことが十分に予想できる。更に、C文化との比較でも同じことが起こってくる。

例えば、日本語の「駅」という語について、中国語の「車站」を基準に比較すれば、次のようなことが記述できるのではないかと思われる。

【駅】①切符は自動券売機で買う。小銭がない人のために、両替機が置いてある所もある。路線図や運賃が詳しく掲げられている。ロッカーの置いてある所が多い。地下鉄や私鉄の駅の改札は、自動になっている所が増えている。エスカレーターが設置されている所も多い。②次の列車が前のどの駅まで来ているかが電光案内板などで示される。列車が入るたびに、放送がなされる。朝の通勤ラッシュの時間帯には、人を電車の中に押し込む「押し屋」がいる。③売店があり、新聞やドリンクやパンストなどが置いてある。④入口の近くに放置自転車が多く、問題になっている。場所によっては、撤去されるが、保管場所に

取りに行く場合は、保管料として、1500円ぐらい要る。⑤近くには、パチンコ店やデパートや銀行や飲食店などがある。

これは「自動券売機や両替機やロッカーなどが無い、路線図や運賃が詳しく掲げられていない、改札が自動ではない、エスカレーターがほとんどない、予告や放送が頻繁になされていない、通勤には電車が使われていない……」という中国側の「車站」の事情と照らし合わせて、「駅」という語を聞いて、日本人が連想できるが、中国人が連想できないものを書き出したものである。もし、これをアメリカの「station」と比較する場合、その中の多くのものは記述する必要がなくなったり、新たに追加しなければならなくなったりするであろう。

外国人の日本語学習の目的は、日本語を使って、日本人と円滑にコミュニケーションをしたり、日本の書物を通して、日本の進んだものを学び取ったりするところにあると言えよう。文化的要素の比較の基準の設定も、この目的を出発点とし、当外国語一つに絞った方がよい。また、記述する際の範囲も、当外国人が日本での言語生活を順調に営んだり、日本語で書かれたものを正確に理解したりするのを助けるためのもの、というように限定されてくるのである。

### 1.3 文化的要素の範囲について

留学生が日本で研究、学習活動を円滑に行うためには、単にそのことばを自国語に置き換えて（語対語翻訳）理解するのではなく、そのことばの文化的要素の学習に力を入れなければならない。「風呂に入る」ということばは教わったが、ホームステイに行き、湯船の中でせっけんで体を洗い、出る時風呂の湯を全部捨ててしまったというのでは、「風呂」ということばに対する真の理解は得られない。ある程度日本語を習得して、聞く力も話す力もある者でも、実際の生活の中で、文化的要素の勉強不足に起因する失敗は避けられない。これらのことは、個々の留学生が自分の手探りか、友達との口コミから一つ一つ覚えていくのが現状である。

留学生にとって、紹介すべき文化的要素の範囲をどう決めたらよいか。筆者は留学生でもあるし、日本語を教える立場にもあるので、自分の体験

から、次のように緊要度の高いものから順に、並べてみた。

1. 風呂の入り方、買物の仕方など日常生活に関するもの
2. 駅の風景など普段街で見られる事柄に関するもの
3. 一般的な知識や教養に関するもの
4. 風俗習慣、ものの考え方に関するもの

ことばを教えるかたわら、上述のような身近な文化から紹介していけば、日本にいる外国人留学生、中国帰国者、定住難民、帰国子女ばかりでなく、外国にいる外国人日本語教師と日本語学習者も、日本人との意志疎通の円滑化が図れるばかりでなく、日本および日本人の文化、社会の在り方を考える手掛かりにすることもできる。

特に、日本語教育の基礎段階にいる留学生に対しては、文化的要素の範囲を考える時、次の二点が大事である。

一つは、いま現在の日本の社会で、生きている文化的要素の紹介に、重点を置くことである。例えば、「男」と「女」の文化的要素について教える時、昔は、「男は仕事、女は家事」というように、相場が決まっていたが、今は、女性の社会進出が目ざましく、このようなパターンが破られつつあることを強調しておく必要がある。学習者に日本のイメージとしていたずらに古いものを与えることはマイナスに働くことが多い。あくまでも、現代の日本のありのままの姿が反映できるようなものを選択しなければならない。

もう一つは、日本文化に普遍的なものに重点を置くことである。これは、留学生が日本のどの階層の人と接触しても、必ず使うことができる代表的なものを優先して選ぶということでもある。例えば、大阪では、人と会うと「もうかりまっか」というあいさつをする人がいるが、これは、「大阪」を話題にする時のたねにはなるが、「もうかる」という語の文化的要素としては、適当ではない。また、「あいさつ」という語の文化的要素としては、やはり天気が話題になることをまず教えておく必要がある。「暑いですね」とあいさつしたのに、留学生から「いいえ、全然暑くない」と答えられて、話が続かなくなった経験を持っている人はたくさんいると聞いて



いる。これは、留学生側の「暑い」ということばの文化的要素に対する理解が不足していることを反映したものであろう。

## 二 文化的要素に関する辞典の構想

### 2.1 文化的要素の紹介の必要性

特に初級・中級の段階では、文化的要素の紹介が必要であるか、また必要ならどのように紹介するかについて、意見が分かれている。その段階では、学生が知っている単語が少なく、文化的要素について紹介するには、レベルが低すぎるという心配があるからであろう。このような心配は、結局のところ、文化を伝統や思想などとして理解していることに由来するものであると思われる。しかし、文化を本稿で言う生活密着型のものとしてとらえなおせば、紹介は自ずと必要になってくるし、可能になってくるのである。たとえば「ありがとうございます」は、よく「どういたしまして」と一緒に教えられているが、店員から「ありがとうございます」とあいさつされた時も、「どういたしまして」と答える留学生がいる。「どういたしまして」は、どういう時に使うか、どう使ったらいいかなどを含め、文化によってそれぞれ違う。因みに、中国では、長年来の習慣で、日本と違って、客が店員に「ありがとうございます」ということになっている。そのような文化的背景の国から来た人にとって、店員からあいさつされると、かえって恐縮し、戸惑ってしまうものである。

### 2.2 辞典編纂の構想

文化的要素を紹介するには、まずその基礎資料としての辞典を作ることから着手しなければならない。

この種の辞典は、日本語学習の興味と特徴を考慮に入れ、文化的要素という角度から、語に対して、叙述的な説明を与えるものであると考える。普通の国語辞典との相違は、「概念的意味」はなるべく省いて、もっぱら文化的要素を記述するところにある。百科事典とも異なる。百科事典は、科学知識という角度からことばを選び、非学術的な日常の語彙を視野に入れてない。また、百科事典は、知識を広めるという役目から、なるべく詳

しく説明がなされている。それに対して、この種の辞典は、専門的な知識ではなく、日本語学習者の角度から見て必要な、生活密着型の知識を提供するものである。採用する語は、常用のものを主とする。現代日本語の使用頻度とは直接関係がなく、あくまでも、留学生の実際の状況と、実際の要求を第一に考える。そこで、日本語教科書とリンクするという観点から、見出し語の採取は、『日本語教育基本語彙七種比較対照表』(1983)によって、行ってみることにした。

### 2.2.1 見出し語について

普通の国語辞典から語を採ることも考えられるが、外国人が日本語を勉強する際の資料としては、範囲が広すぎて、必ずしも外国人が実際勉強の時に出てくる単語と一致しない部分が多いという欠点がある。一方では、ある日本語の教科書をベースにその総語彙表に従って採ることも考えられるが、偏りがあり、その教科書を使用していない留学生にとっては不利である。最終的には日本語学習に必要な語彙として行ったいろいろな調査データや日本語教科書から採られた語が集められている『日本語教育基本語彙七種比較対照表』に行き着いたのである。

ここで言う「七種」とは、次のようなものを指すということである。①岡本禹一(1944)『日本語基本語彙』, ②加藤彰彦(「1963~4」)『日本語教育における基礎学習語』, ③玉村文郎(1970, 78)『Practical Japanese-English Dictionary』, ④樺島忠夫・吉田彌壽夫(1971)『留学生教育のための基本語彙表』, ⑤文化庁国語課(1971, 75)『外国人のための基本語用例辞典』, ⑥J. V. Neustupny(1977)『A Classified List of Basic Japanese Vocabulary』, ⑦国立国語研究所・日本語教育センター(1978)『日本語教育基本語彙第一次集計資料——2000語』となっている。

『日本語教育基本語彙七種比較対照表』に登録されているすべての語に目を通し、一中国人から見て、生活に密着していて、しかも日本独特な文化的要素が取り出せそうな単語を選んで採ることにしている。例えば、「あ」のページ目からは、総数23語の中から、「あいさつ」「アイスクリーム」「愛想」「相手」「会う」と、とりあえず4語だけ選びだした。語の

選択は、編纂する途中でも増減したりして、主観的な面が多いという問題がある。

見出し語の配列はあいうえお順にする。「お酒」「お茶」など「お」のつく語は、留学生が丁寧なことばを勉強しているという実情に合わせて、「お」がついた形で掲載する。ただ、「お茶」のように、「お」の定着度が高い語については、「茶ともいう」と注記し、「お茶碗」のような「お」の定着度の低い語については、「普通は茶碗という」と注記する。

### 2.2.2 語釈について

文化的要素の辞典なので、主に文化的要素について語釈を与えるという原則を貫くのである。具体的には、次の幾つかの点に気を付けている。

1. そのことばの定義は、なるべく避けて、その語と関連のある文化的事象や人々の認識の説明を中心にする。例えば、「お風呂」を例にすると、普通の国語辞書にある「入って体を洗う湯（を沸かす湯船）」という定義を避けて、その代わりに、風呂に入る頻度や、湯の温度や、体の洗い方などを記述する。また、湯船につかる目的は、体を洗うためではなく、疲れを取るためであること、親子が一緒に入るのは、一種のスキンシップであり、友達が一緒に銭湯へ行くことは、友情を深めることであるというような、お風呂に対する人々の認識をも記述する。

2. 中国人が主な読者であるという想定で編集するので、比較の基準は中国の文化とする。但し、中国は広い国なので、地域により差が大きい。ここでは筆者の出身地上海の事情と、筆者の学習や経験によりいまままで蓄積してきた中国文化に関する知識をベースにする。日本のことを中国と比較し、中国と同じであることは記述しない。例えば、体を洗う時、せっけんを使うのは、中国も日本も同じなので、記述の対象外になる。髪の毛の場合は、中国は女性を除いてせっけんがまだ主流であるが、日本はシャンプーとリンスが主流である。その違いを、日本のやり方を説明することによって、記述する。また、うち風呂や銭湯や温泉における性別の問題にも、日本独特なものが見られる。具体的には、うち風呂では、異性の親子でも、子供が小学校二三年までは、平気で一緒に入ること、銭湯では、番台や掃

除のおばさんを気にしないことに、それを窺い知ることができる。

3. 時代背景は、現代に設定する。昔はあったが、今はないことは、なるべく避けることにする。わけても、1986年～1991年の最近の六年間に現れた新しい動きで、これからも存続していこうと思うものや、いま現在或いはこれからの社会を示唆するようなものも、なるべく記述するようにする。例えば、修学旅行の生徒の中に、海水パンツをはいて温泉に入る人がいるというようなことは、記述の対象になる。これは、銭湯文化がうち風呂文化に取って代われつつあること、集団中心の社会から個人中心の社会へ移行する象徴として、考えられなくもないのである。

4. そのことばが中心になり、常用の、しかも日本人の独特の考え方を反映している慣用句のことわざをも付記する。例えば、「裸の付き合い」や「鳥の行水」などである。

5. 以上のことから見ても分かるように、語の選択から語の説明まで、到るところに筆者の主観が滲み出ている。「概念的意味」の辞典は客観性が生命であるが、文化的要素の辞典は、文化的要素自身が主観性があるゆえ、ある程度の主観は避けて通れないところもある。それを少しでも正すために、記述内容に関して何人も日本人に意見を出してもらい、それを参考に何回も書き直した。これについては、後述する。なお、外国人留学生として日本で生活する際の注意事項や生活の知恵も記述の対象にしている。

### 2.2.3 【お風呂】の文化的要素についての記述例

【お風呂】①普通は「風呂」という。シャワーだけでは満足せず、体全体を湯船に浸かるように、毎日入浴する人が多い。お湯の温度は熱め（摂氏42度以上の所が多い）である。最近では、若い人の中で、ぬるま湯好みの人も出てきた。⇨【湯】②一部のホテルを除いて、お風呂はトイレと別々になっているのが普通である。うち風呂の湯船は、香りや肌触りがよいひのきで作られたものが貴ばれる。③湯船の中では体を洗わない。湯船に入る主な目的は、体を温め、血液の循環を良くし、疲れをとることにある。タオルは、持って入る場合は、頭にのせ

て、湯船の中では使わないことである。湯船に入ると、気持ちがよくなって、深呼吸をして、「ふ～」と息を吹いたり、思わず「極楽、極楽」と言いたくなったりする。普段あまり歌わない人でも、歌を歌うことがある。お風呂を出たら、次の人のために、お湯を捨てない。熱が逃げないように湯船に蓋をする。お風呂の残り湯は、後で洗濯機に入れ、衣類を洗うのに使う家庭がある。④シャンプーで髪の毛を洗う。髪の毛を保護するという意味で、後でリンスを使う人もいる。⇨【髪】⑤親は子供と一緒に入ることが多い。小学校二、三年までは、異性の場合もあまり気にしない。一種のスキンシップである。⇨【親子】⑥銭湯は、その数が年々減っている。入浴料は、たいていたばこ一箱分に相当する。入口に番台という人がいて、脱衣場が見られるが、全然気にならない。ガラス戸を開けて入る時は、前をタオルで隠す。今の高校生などは、うち風呂になれているせいか、海水パンツや水着で入る人もいる。⑦洗う時は、隣の人に水しぶきをかけないように、腰掛けて、姿勢を低くする。⑧うち風呂のある人でも、時々銭湯へ行く。銭湯にサウナ、薬湯、打たせ湯、ジェット噴流、各種の健康機器といった付加価値を求めている人が多い。また、一緒に銭湯へ行くことは、「裸の付き合い」といって、知人の背中を流すなど、付き合いを深めることができる。裸になれば、人はみな平等になり、打ち解けて付き合い合えるのである。⇨【温泉】⑨お風呂に入ったと思ったら、すぐ上がってくる人のことを「烏の行水」という。

以上は、「お風呂」という語に盛られている文化的要素を一つのサンプルとして書き出してみたものである。

全体を関連づける役目を果たすために、語釈に「参照せよ」の意味で、「⇨」の符号を付ける。また、索引部分は二つ設け、一つは見出し語の索引で、もう一つは記述語の総索引である。いずれもあいいうえお順である。時間的余裕があれば、中国語と日本語の対照版を作り、日本語には総ルビを施すことも考えている。そうすることにより、日本語のできない日本研究者や日本語学習の入門段階の者にも広く利用させることができるように

なる。

### 2.2.3 コメンテーターの意見について

この原稿を書く時点まで、「あ」から「か」までの記述は一応終了したが、各語について、いずれも作り上げた原案を、男女10人以上の各階層の日本人に見てもらい、意見を出してもらった。この作業を何回も繰り返した。

例えば、「一応」という語について、最初は

【一応】「～できました」「～行きました」というように、ほとんどすべての動詞の前に付けることができる。あいまいな表現の一つで、自信のなさの表れである。

と記述したが、何人にも意見を出してもらっているうちに、何人かから、日本人のいわゆるあいまいな表現は、相手の考え方や立場を思いやる表れとして理解できるということが指摘された。そこで、わたしの感じたことを保留しながら、コメンテーターの意見を取り入れて、最終的に次のように書き直した。

【一応】「～できました」「～行きました」というように、ほとんどすべての動詞の前に付けることができる。自分では充分にできたと思っても、相手（上司等）から見ると、不完全な部分があるかもしれない。そういったお互いの考えのギャップを補うための表現の一つである。ほかに、「～と思う」「～らしい」「～ようだ」「～という感じ」「～と考えられなくもない」など、断言を避けるあいまいな表現が多用されている。これらの表現は、完全、完璧、絶対等を避けて、相手の考え方や立場を思いやる表れとして、理解されているが、場合によっては、自信のない表れ、或いは責任回避の表れととれることもある。

## 三 文化的要素と日本語学習

### 3.1 文化的要素の紹介の順序

辞典ではこれといった順序がないが、それを使って実際留学生に紹介する時は、ある一定の順序がある。ことばの場合は、易しいものから難しいものへとなるが、文化的要素の場合は、それ以外に、緊要度の高いものか

ら順々に教えていくことが大事である。緊要度を正確に測るには、やはり留学生が日本で生活していく、或いは日本人と付き合っていく中での困難点や問題点を、まず把握するのが先決である。紹介者自身が留学生で、しかも日本文化と自国の文化を両方熟知している者は、最も理想的である。どれを先に紹介したらよいか、どれを後回しにするか、また、どのように紹介するかなどについても、敏感に感じとることができると思われる。

例えば、「女」という語の文化的要素として、

【女】①「男は度胸、女は愛嬌」というように、女性に対しては、優しさと可愛らしさが要求される。男性の使うことばと女性の使うことばは、いろいろな面で異なっている。できるだけ若く、女らしく思われたいという気持ちから、電話する時は、普段よりも声のトーンを高くする女性が多い。②結婚後は、妻が夫の姓を名乗る。養子やその他の理由により、稀に夫側が改姓することもある。③男女雇用機会均等法の施行に伴い、また人手不足ということもあって、女性の就業人口が増えている。主な就職先はサービス業である。ただ、賃金や昇進などの面において、男性との格差がある。④家では男の面倒を見るが、職場でも電話うけやコピーとりの単純な仕事と、お茶くみや雑巾掛けの雑用に回されることが多い。⑤最近、職場で男の上司から受けた性的嫌がらせを「セクハラ」（「セクシャル・ハラスメント」の略）といって、糾弾されている。⑥「女人禁制」といって、能の舞台、一部の山や開通前のトンネル、相撲の土俵内には、女性が入れないことになっている。また、お宮参りの場合、出産して日が経っていない母親が、神社側に一方的に断られるといったケースもあり、女を不浄なものと思わず習わしのなごりによるものであろう。

と記述できるが、中国人学習者に「女」に関する文化的要素を紹介する際には、その全部をいっぺんに紹介するのではなく、中国と比べて、最も特徴的な次の三つの面を重点的に紹介した方がよいのではないと思われる。

a. ことばの男女差が大きく、「男は度胸、女は愛嬌」ということばに見られるように、「女らしさ」の内容に相違がみられること

- b. 結婚後は夫の姓を名乗るのが普通であり、会社では雑用に回されることが多く、女人禁制の所が残っていることなどに見られるように、女性の地位に相違が見られること
- c. 最近では女性の社会進出が目ざましく、女性運動が高まりつつあること
- 以上の三つの点である。これらは彼らの疑問点でもあり、文化不適應が起きやすい点でもある。

### 3.2 文化的要素を考慮に入れた教材づくり

#### 3.2.1 教材のタイプ分け

文化的要素の紹介と日本語教育との結合は、教材の中でまず実現させなければならぬ。文化的要素を提供する教材がなければ、その紹介は困難である。この種の教材は、二つのタイプに分けることができる。一つは文化的要素を主とし、すべてが文化をめぐる編集されるものである。この種の教材の使用は、対象がある程度の言語水準に達した者に限る。例えば、「お茶」をテーマに以下のような一問一答の会話形式で教材を編むことができる。(王=日本に来たばかりの留学生、林=日本人)

林：王さん、お茶をどうぞ。

王：ありがとうございます。日本人はふつうどんなお茶を飲みますか。

林：人によって違いますが、まあ、どちらかというところ、緑茶が多いでしょう。

王：この前、わたしはある日本人の友だちに誘われてお茶の会に行きましたが、そこで飲んだお茶はふだん飲んでいるのと違いました。

林：あっ、それは抹茶といって、細かい粉にしたお茶で、茶道で使うものです。

王：ほかにどんなお茶がありますか。

林：ほかに麦茶や昆布茶などがありますが、それぞれ炒った大麦・乾燥した昆布の飲物です。お茶の葉っぱは入っていません。また、玄米の入った玄米茶や番茶などもあります。

王：お茶の葉っぱと言えば思い出したのですが、日本のお茶は、どうしてお茶の葉っぱが見えないのですか。



林：それは急須を使うからです。急須の注ぎ口には、細かい穴がたくさんあって、その穴を通して、お茶は出ますが、葉っぱは出ないようになっています。

王：この前、日本人の家へ行ったとき、お茶をすすめてくれましたが、小さい湯飲み七分目しか入っていませんでした。飲み終わったら、もう一度入れてくれると思っていましたが、入れてくれませんでした。暖房が効いていたし、口もかわいてかわいてたまりませんでした。

林：さっき茶道の会に出たと言ったでしょう。その時のお茶も少ししか入っていませんでした。

王：そうです。わたしはすぐ飲み干してしまいました。

林：日本人はお茶を入れるときは、満杯にしないのがふつうです。控え目が美德とされています。お茶を出した後で、それとは別に、コーヒーを出すことはあります。

王：昨日、「お茶でも飲みませんか」と誘われて、ついていったら、お茶ではなく、コーヒーを飲むところでした。

林：「お茶でも飲みませんか」というのは、一緒に喫茶店へ行く誘いの文句としてよく使われています。その時の「お茶」ということばは、ふつうのお茶だけではなくて、コーヒーなどの飲物一般を指しています。ところで、昨日はだれに誘われましたか。

王：友だちです。

林：恋人ですか。

王：それはええと……。

林：お茶を濁さないでください。

王：「お茶を濁す」といいますと……。

林：「お茶を濁す」というのは、王さんのように、はっきり答えてくれないという意味です。

王：あっ、もうこんな時間になりましたか。今日はいろいろ教えて頂いてありがとうございます。

このように、このタイプの教材は、本文自身が直接、文化的要素を紹介

するものである。文化的要素が全編に反映されており、説明と注釈も必要なく、会話を組むことができる。勿論、文法項目（例えば、～ようになっている）や単語も学習することができる。但し、文化的要素を紹介するために、学習の難度を増すようなことがないよう、気を付けなければならない。この種の教材は、知っている単語が限られている初級の段階の学習者には、あまり適さないと思われる。

もう一つのタイプは、言語形式の学習を主とし、文化的要素の学習を副とするものである。即ち、文化的要素については、長々とするものではなく、授業の中で、教師がひとこと指摘すれば分かるような程度のものである。例えば、電話のかけ方であるが、中国人は、相手の名前を先に聞くのに対して、日本人は、自分の名前を先に言うのがふつうである。中国語の教科書を何冊か調べてみたら、いずれも先に相手の名前を聞いているものばかりである。カッコの中は中国語の直訳である。

山本 喂，是李国華先生家吗？（もしもし，李国華先生のお宅ですか）

李夫人 是啊，你找誰？（はい，そうですが，あなたはだれをさがしていますか）

山本 我找李先生。（わたしは李先生をさがしています）

李夫人 好，請等一等。我去叫他。（はい，少々お待ちください。わたしは彼を呼びに行きます）

——『基礎中国語会話』東方書店

これはもし日本語の教材の場合、おそらく次のようになるのではないか。

山本 もしもし，わたしは山本と申しますが，李先生のお宅ですか。

李夫人 はい，そうですが。

山本 恐れ入りますが，李先生はいらっしゃいますか。

李夫人 はい，おります。少々お待ちください。

そこで、日本語のテキストを中国人に教える際には、その違いについて、学生にひとこと注意を喚起した方がよい。この種のは、初級段階の学習者に適している。また、先にも触れたが、あいさつを教える際には、なるべく「寒いですね」「いい天気ですね」など、天候に関する「～～ね」

を意識的に入れることが望ましく、それらのものは、実質的な意味を伴った質問ではなく、単なるあいさつであることを学生に知らせて、「ええ、そうですね」と答えればいいと説明する。そうすれば、相手が「暑いですね」とせっかくあいさつしてくれているのに、そうとは知らずに、「いいえ、暑くないです」といらぬ返事をしなくても済むのである。

### 3.2.2 読解の教材における文化的要素の取扱い

読解の授業は、翻訳の過程も含まれており、往々にして、自国文化の干渉を受け、正確な理解が妨げられがちである。そこで、学生がつまずきそうな所をフォローし、特に初級の段階では、学習者の自国語で、言語項目に注をつける形で、文化的要素を説明しなければならない。例えば、「お寺」という単語が出たら、「神社」と区別するために、次のような記述から、注となるようなものを選びだすとよい。

【お寺】「てら」ともいう。お寺と神社はどちらも宗教関係の建物である。お寺は仏教の建物で、神社は神道の建物である。両者を見分けられない日本語学習者がいるが、ひとことで言うと、お寺は鳥居がなく、人間の体をした像があるのに対して、神社は鳥居があり、人間の体をした像はない。但し、明治時代以前に「神仏混淆」といって、お寺と神社が同居していた時期があった。そのなごりで、鳥居の中にお寺がある所も少数ながらまだ残っている。また、お寺によっては、鐘や塔がある所もある。お寺で仏をまつことを業とする人を「お坊さん」と言うが、神社で神をまつことを業とする人を「神主」と言う。

とにかく、いずれのタイプの教材でも、その段階の学生のレベルに合ったものでなければならない。既に教えたものについては、練習しなければならないが、その練習にも文化的要素を織り込ませる必要がある。応用能力を付けさせる練習というと、例えば、次の文に出会った時、どれだけイメージをふくらますことができるかを練習させればよい。

旅館でおいしい食事をとり、ゆったりと温泉につかると、旅のつかれはいっぺんに消えていくようでした。

温泉郷には旅館街がある。温泉へ行っている会社の慰安旅行などの団体客は、そこで二三日泊まる。「体の芯から温まる」と言っ、心身とも解放される。温泉は、健康と美容の効用があるばかりでなく、精神的な面でもプラスになると信じられている。ゆっくり浸かって一息入れた後、浴衣姿で宴会場に集まって、ビールやお酒を飲みながら、社員同士の親睦をはかっている。料理は、刺身などその地方の特色のあるものが出される。このような練習を積み重ねていくと、ことばに対する理解も深まるのである。

### 3.3.3 「報刊閲読」科目における文化的要素

上級のクラスになると、日本の新聞や雑誌（主に週刊誌）の記事をそのまま持ってきて教材にするところが多い。これは中国では「報刊閲読」と呼ばれている。日本の新聞や雑誌を読みこなすには、普通の国語辞典に見られるような記述を頼りにするだけでは、とうてい足りないのである。その足りない部分を補うものとして、文化的要素の勉強が必要になってくる。例えば、手元の新聞（この原稿を書いている当日の1990年11月27日の朝日新聞）を例にとると、4ページの「手紙」欄に次のような投書があった。「現地の人と触れ合って真の理解が」という題で、観光名所やブランド品店ばかりを回るといような海外旅行の現状を批判する手紙である。この投書は、「海外旅行」ということばの文化的要素で理解するのによい教材になると思われる。

【海外旅行】海外旅行の人数は年間一千万人を突破し、円高なども手伝って、年々増えている。一方では、バックツアーという形では、駆け足旅行になりがちで、現地の人との心の触れ合いが少ない。集団でブランド品店などに殺到する光景は評判があまりよくない。

上記の記事と「海外旅行」の文化的要素についての記述を照らし合わせて読めば、日本に対する理解は、もっと深められるであろう。もし、辞典が最後の「わ」まで完全に出来ていれば、これを参考に、学生も先生も日本の新聞や雑誌を読むための下準備をすることができるのである。

#### 四 結 語

「郷に入れば郷に従え」という諺があるが、たやすく実行できることではない。そのためには郷についての情報を仕入れることが先決である。しかし、人間は惰性があり、異文化体験の時、大きい違いに対してはカルチャーショックを覚えてうろたえるが、小さい違いは見過ごしてしまうことが多い。結局、適応するまで失敗を繰り返すほかはない。もし、実際の体験より先に、予防注射に当たる予備知識を少しでも与えていれば、大きい違いの場合はショックを和らげ、小さい違いの場合はそれに気付かせることができると思われる。

日本で生活している留学生は、日本人とのコミュニケーションをしなければならぬし、生活の各方面で日本人と関わりを持たなければならない。留学生の観点から見て、これだけは絶対必要であるという文化的要素を、ことばの意味の一部分として、教材や授業の中で取り上げる必要に迫られている。本論では、語の意味の中での文化の部分を取り上げ、それを文化的要素としてとらえなおし、教材や授業実践を通して、意図的に学習者に学ばせる方法をいろいろと論述してきた。これはあくまでも一つの提言であって、今後は実践に付してその効果の如何を検証する必要がある。

最後に、語の文化的要素の記述にあたっては、多くの方のお世話になった。これらの方々には、記述者の意図をよく理解して、いろいろな角度から貴重な意見を出してくださった。また、本論文の執筆にあたっては、佐治圭三先生、徳川宗賢先生、土岐哲先生から有益な助言をいただいた。ここに感謝の意を表す。

#### 参考文献

- ジェフリー・リーチ1977『現代意味論』研究社出版  
 國廣哲彌1982『意味論の方法』大修館書店  
 国立国語研究所1983『日本語教育基本語彙七種比較対照表』大蔵省印刷局  
 本名信行、ペイツ・ホッフア1986『日本文化を英語で説明する辞典』有斐閣  
 高 偉建1988「日本の漢語に於ける文化的意義特徴」『語文と教育』2  
 本名信行、ペイツ・ホッフア1989『日本人の考え方を英語で説明する辞典』有斐閣

- 倉地曉美1990「学習者の異文化理解についての一考察——日本語・日本事情教育の場合——」『日本語教育』71
- 水谷 修1990「日本事情とは何か」『言語』Vol. 19-10
- 細川英雄1990「日本事情の授業・2——教養部スタッフと協力して」『言語』Vol. 19-10
- 奥西峻介1990「日本事情の授業・3——日本事情から日本文化へ、そして…」『言語』Vol. 19-10
- 砂川裕一1990「日本語教育能力検定試験と日本事情」『言語』Vol. 19-10 朝日新聞  
(文学部日本学科院生)